

短編小説 『*ー* (アスタリスク)』 white

caps

###

二人は、夕方の団欒の前のそれぞれの時間を過ごしていた。

かいみつぎ

みちひろ

甲斐海月と途大は、一年前に結婚した新婚の夫婦。アツアツの恋愛の末結婚した二人だが、でも夫の反応は最近かんばしくない。最近海月の呼びかけにも夫の途大は生返事で、結婚当初の熱はどこへやらだった。海月はそんな夫の態度に少なからずさみしさを抱いていたが、最近の途大はいつもそんな感じだ。

今日は海月は夕食のイカと里芋の煮物を作る。海月は手慣れた包丁さばきでイカをさばいていた。

思えば結婚前は途大のために苦手な料理を上手になろうといろいろな料理を練習しては、指を切ったり、フライパンを焦がしてせつかくのフツ素加工をムダにしたりしていたものだ。そんな海月の思いも今は知らず、夫の方はテレビの前にあぐらをかいて座りながら、新聞を広げて読んでいる。海月は、コンロの火を消すと、できあがったイカと里芋の煮物を皿に盛りつけに、居間のテーブルに鍋を持ちながら歩み寄った。

相変わらず途大は新聞に見入ったままだ。そして途大が新聞をめくろうとしたとき、途大の腕の影から、海月の目にある記事が飛び込んできた。

「ふたご座流星群 今夜極大」

海月は不意にはしを置いた。

「ちよつとあなた、まって、その記事」

「ん？」途大が間の抜けた返事をする。

海月は鍋のほうもテーブルの上に置くと、途大のそばに駆け寄った。

「これ、見てよ、この記事。」

海月は新聞をめくって面を戻すと記事を指さす。

「おお、ふたご座流星群が極大か。」——途大は何ともなしに言った。

海月は途大のみをのぞき込むと、

「ねえ、あなた見に行きましようよ！これ。今日の夜よ！」

途大の肩を押してねだった。

「え、なんで？」

途大はまた気のない返事をする。

「だって、あなた、星空見るのすごい好きだったじゃない。忘れたの？ あの時私たちが見た星空のことを」



途大は昔、病気と言ってもいいほどの天文マニアだった。子供の頃街の店先で見つけた望遠鏡キットを親に無断で買ってきては自分で組み立てて、その空に見えるオリオン座の観察をしたことさえあった。

一人息子だった途大は、子供の頃は親にかわいが

られた。しかし大学に進んで天文に関わる勉強をしている途中に徐々に仲違いが起こるようになって、最後は両親に勘当されて大学院に行くのをあきらめることとなった。

そのあと途大は天文台勤務を望んだが、叶わず今は町の工場で工作機械の設計の仕事をしている。ちなみにこの仕事は数字でも長さでも線の一つでも間違えると機械は正確に動いてくれない。途大はその今の仕事の奥深さにも惹かれていたし、これが自分の仕事なのだと思心に決めていた。仕事はそれなりに手慣れたものだったが、でも途大は、ずっと心の中では夢を忘れられずにもいた。

——二人は先ほども言ったとおり恋愛結婚だった。親に勘当されたあと、ずっと一人で暮らして

きた途大を見て、根が親切な海月はほうつておく
ことが出来なかつた。海月は、一人草原で望遠鏡
くさはら
をのぞき続ける途大の姿を今でも覚えている。そ
の時海月は、自分はこの人のそばにいてあげたい
とどこからともなく思ったものだ。

一見冷めた性格のように見える途大も、海月が思
いを打ち明けるとそれを受け入れて、そしていつ
しか海月のことを深く愛するようになっていった



二人は新婚旅行の時、奄美大島に行った。

そしてその旅の途上で鹿児島からフェリーに乗つ
たのだ。

その時海月は眠い中途大にたたき起こされた。

そしてぶつぶつ文句を言いながら、途大に甲板まで手を引かれて連れて行かれた。

そして甲板に上がる階段を上ったとき、目に入ってきた星空は、

何とも言えない美しい、そして雄大なものだった

一面の星空。

その空には隙間なんてものはもうなかった。

一面、赤や青や黄色や白の星で埋め尽くされ、どの星がどの星なのかさえわからない。

そして空の真ん中を、天の川が乳を流したように

うつすらと、

……

そしてはつきりと横たわっていた。

海風吹きすさぶ中、空を眺めながら途大は興奮したように語った。語り尽くした。

「あそこに見えるのはプレアデス星団、あそこに見えるのはオリオン星雲、あそこに見えるのは北斗七星。みろよ、南十字座が見える！　うわあ！　……これはすごい——　知ってるか、オリオン星雲ってのは、あんな風に光って見えるけど、実は宇宙に漂うガスの集まりなんだ。そしてそのガスとかチリが集まって、いくつもの新しい星が生まれる。そしてその光を受けてガスが輝いて、あんな風に見えるんだ。まさに星の一生が、あの雲の中で起こっているんだよ」

海月はその時、途大の顔を見た。途大の顔は寒風にさらされて熱ほてっていた。途大の無垢な目はただ大空を見つめていた。そしてその顔を見た海月は、

「そうね……」

と呟くと、海の上の薄闇の中、そつと途大の腕を引き寄せて目をつぶった。

肩を寄せ合った二人は（途大の方は星空を眺めたままだったが、もちろん海月の行動はわかっていた）、無数の星たちが見まもる中、静かに、愛を誓い合ったのだった……。

——そして海月は今もその時のことを忘れてはいなかった。

そして途大にも忘れてほしくなかった

そう、途大が忘れていないと信じたかった

今日流星群があらわれると言うことは、海月にとつてあの時のことを途大に思い出してもらえらかももしれないわずかな希望だったのだ。

そして、海月の言葉を聞いた途大は、めんどくさそうに、でも、何か心に思い出すものでもあったように、

「そうだな。暇だし、たまには行ってみるのもいいか」と言つた。



二人は夕食を食べ終えたあと、外套を着てから家を発つ。家々の隙間から見える空は雲はなく、あ

のオリオン座の影が見える。そして、二人は家の近くの高台の空き地に向かった。

そこは自宅の近くにある空き地だった。この住宅地が出来た頃からの普請場で、時々工事の時に使われるものの空き地であることはずっと変わっていない。手軽に星空を見るには最適な場所だ。

空き地に着いた二人は、暗闇の中かすかに見える草原の中に並んで寝ころんだ。芝生のちくちくとした感触が首の周りや手首や、靴下の上から感じられる。そして、30分くらい経ってからだろうか、夜空に、流星が流れはじめた。

それは、ユラユラとあらわれたかと思うと、パツと光って消える。その繰り返しだ。

そしてそれを繰り返す度、だんだんその間隔が狭まり、夜空が、流れ星で覆い尽くされていく。

遠くで流れ星に気づいた別のパーティーが、夜空を指さしていた。

それはもう、地面まで落ちてくるのではないかと言うくらいだった。

そして海月が途大の顔を見たとき、海月はアツと思った。

そう、それはあの時と同じ、ほおに赤味がさした、心の中のこらえきれない熱い思いが、目を輝かせている顔だった。

そしてもう海月は何も言う必要はなかった。途大はゆっくりと口を開くと、やはりあの日のよう

に、語り出したのだ。

「おまえ、こう考えたことあるか？ 昔から星

空つてのは天球つて言つて一種の半球のように捉えられていた。つまり平面として考えられていたわけだ。でも実際は違う。近くにあるように見える星でも、全然奥行きは、地球からの遠さは違つたりするんだ。そう考えるとわくわくしないか？」

そして途大は言葉を続けた。

「この星空にはとてつもない奥行きがある。何光年も、いや、百何十億光年もだ。昼間は見えないこの宇宙の空間が、夜になると俺たちの目にどこまでも続いていくんだ。遙か昔の古の時間から、いにしえ

空には色とりどりの星が輝き、そして時空を越えて瞬いて、俺たちにメッセージを送ってきている。俺は、いや違う、誰しもがそれを見て、宇宙の壮大さ、果てしなさ、時間の雄大さを思い浮かべるのさ。」

そして、一言おいて、途大は叫んだ。

「ほら、見てみるよ！俺たちの前には果てしない世界が、未来が、宇宙があるんだ！」

かいみちひろ

そのあとはもう、途大は、甲斐途大は何も言わずに、子供のそれのように口を少し開けながら、興奮の面持ちで星空に魅入っていた。

その声を聴きながら、海月は最近かかった会社の定期検診の時、病院の医者に言われたことを思い出していた。

その時医者はこういつた。

「甲斐さん、あなたは子宮内膜症です。」

「えっ？……」

「変に期待を持たせたくないので単刀直入に言いますが、子宮内膜症にかかった人は子供を望めない場合があります。全てがそうとは限りませんが、そう言う人も多くいます。」

医師は続けた。

「あなたは結婚していましたがね。ならばこのことは旦那さんに伝えておいてください。夫婦の間の、大事なことですから。」

——医師の言葉が夜空に消えていく。海月はまだそのことを途大に話してはいなかった。そう、海月は不安だったのだ。途大がそのことを受け入れてくれるかどうか。

海月はまた空を見た。そして海月は途大に聞こえないように何かを呟いた。

途大がそれに気づいて、寝転がったまま海月のほうを振り向いて聞く。

「今なんか言った？」

海月は微笑むと答えた。

「星に願いを掛けてたの」

「へえ、なにさ。」

途大が今度はからかうように聞く。

「流れ星って人に言ったら叶わなくなるって話し

よ」

海月はおどけて口の前に人差し指を当てた。

「それって初詣の間違いじゃないの？」

途大が変な顔をする。「流れ星は流れ落ちるまでに三回唱えると叶うってやつでしょ」

途大の言葉を聞いた海月は、

「そうか、そうね。」

微笑みながら答えた。

「で、なに願ったのさ？　　気になるじゃないか。」

なおも途大がしつこく聞くが、

「ヒ、ミ、ツ。」

そう言ったきり、海月は答えなかつた。

そして海月は心の中で呟いた。

(何を願ったかなんて、そんなの決まっているじゃない。)

海月はそつと途大を見た。

(「あなたとずっと一緒にいられるように」つて、そう願ったのよー！。)

途大は聞こうとするのはもうやめて、今はもう夜空を眺めている。

——海月の思いをのせて、流星は空を流れる。

そして海月はその星空の下、途大の瞳にその夜一番の、特大の閃光が流れるのを見るのだった。

■ (2008.11.23)

###

テーマソング・・『*~アスタリスク~』ORANGE RANGE (ソニー・ミュージックレコーズ)